

## 東アジアにおける国際比較社会調査とその課題

—世界価値観調査、ISSP、アジア・バロメーター、東アジア価値観国際比較調査から EASS へ—

湊 邦生

大阪商業大学比較地域研究所 JGSS ポスト・ドクトラル研究員

Cross-national Social Survey in East Asia

The World Values Survey, ISSP, AsiaBarometer, East Asia Value Survey and EASS

Kunio MINATO

JGSS Post-doctoral Fellow, Institute of Regional Studies

Osaka University of Commerce

In East Asia (Japan, South Korea, Taiwan, China and Hong Kong) in recent years, cross-national social surveys have started such as AsiaBarometer, Asian Barometer (East Asia Barometer) and East Asia Value Survey. These surveys, in contrast with surveys conducted worldwide like World Values Survey and ISSP (International Social Survey Programme), focus their attention on East Asia, and aim at clarifying issues and features which are inherent in East Asia. This article is a review of surveys with East Asian focus, especially surveys whose results are open to public to a degree (AsiaBarometer and East Asia Value Survey). The article also reviews comparative researches based on the results of such surveys. The purpose of the article is to gain understanding and knowledge of the current situation and problems of cross-national social surveys in East Asia, and thus to discuss the issues which EASS (East Asian Social Surveys) project, implemented jointly by the Japanese General Social Surveys (JGSS) project team and South Korean, Taiwanese, Chinese and Hong Kong teams, has to work on.

Key Words : JGSS, EASS, Cross-national Social Survey

東アジア(日本・韓国・台湾・中国・香港)では、近年「アジア・バロメーター」(AsiaBarometer)や「アジア・バロメーター(東アジア・バロメーター)」(Asian Barometer; East Asia Barometer)、「東アジア価値観国際比較調査」(East Asia Value Survey)などの国際比較調査が開始されている。これらは世界規模で実施されている国際比較調査である「世界価値観調査」(World Values Survey)や ISSP (International Social Survey Programme)とは異なり、東アジアに焦点を絞り、東アジアに特有の問題や特徴の解明を目指したものである。本稿では、それらの調査や、調査結果に基づく各国・地域の比較分析の結果について検討し、東アジアにおける国際比較調査の現状と課題について述べる。その上で、JGSS プロジェクトが韓国・台湾・中国・香港のチームとともに実施している EASS (East Asian Social Surveys)プロジェクトが取り組むべき課題について考察する。

キーワード : JGSS, EASS, 国際比較社会調査

## 1. はじめに

ある地域の国々に住む人々を対象として、共通の調査票を用いて国際比較調査を行うことは、ヨーロッパでは早くから実施されてきた。1973年に発足した「ユーロ・バロメーター」(Eurobarometer)は有名である。しかしながら、このような試みは、東アジアでは長きに渡って立ち遅れが指摘されてきた(池田, 2004; 猪口, 2002)。世界規模の調査として知られる「世界価値観調査」(World Values Survey)や ISSP (International Social Survey Programme)に参加している国々もあるが、後述するようなさまざまな問題から、必ずしも東アジア諸国・地域の相互比較に適したものではなかった。

しかし、東アジアにおいても、近年では「アジア・バロメーター」(AsiaBarometer)、「東アジア価値観国際比較調査」(East Asia Value Survey)、「アジアン・バロメーター」(Asian Barometer)の一環として行われている「東アジア・バロメーター」(East Asia Barometer)など、東アジアにおける域内比較調査が行われ、それらの結果に基づく研究も見られるようになってきている。表1と表2はそれらの概要をまとめたものである。

これらの調査に加えて、大阪商業大学比較地域研究所が東京大学社会科学研究所の協力を得て実施している JGSS (Japanese General Social Surveys)が、韓国成均館大学 Survey Research Center チーム及び台湾中央研究院社会学研究所チームと共同で、EASS (East Asian Social Surveys)プロジェクトを立ち上げた。2005年2月には香港科技大学調査研究中心と中国人民大学社会学部のチームも加わり、2006年に「家族」をテーマとする調査を日本・韓国・台湾・中国・香港で実施し、2008年には「グローバル化と文化」のテーマで調査を予定している。

本稿は、東アジアにおける国際比較調査の現状と課題を明らかにすることが目的である。そのために、まず上述した「世界価値観調査」および ISSP について検討し、東アジアに特化した国際比較調査の必要性について述べる。その上で、日本の研究機関が中心となって実施している「アジア・バロメーター」および「東アジア価値観国際比較調査」さらにそれらの結果に基づく研究のレビューを行い、EASS が取り組むべき課題について考察する。なお、「東アジア・バロメーター」については調査結果などを入手することができなかつたので(2007年1月時点)、本稿では詳細な検討を見送ることとした。

表1 東アジアにおける国際比較調査(1)

調査名	参加国・地域	目標対象者数 (年齢) <sup>1)</sup>	回答者数 (回答率) <sup>1)</sup>	実査の方法 <sup>1)</sup>
World Values Survey, 4th Wave (第4回世界価値観調査)	日本 <sup>2)</sup> , 韓国, 中国, 他計96ヶ国・地域	1,000人 (17歳以上)	1,362 (-)	郵送法
ISSP2003	日本, 韓国, 台湾, 他計34ヶ国・地域	1,800人 (16歳以上)	1,102 (61.2%)	面接法
AsiaBarometer 2003 (アジア・バロメーター2003)	日本, 韓国, 中国, タイ, マレーシア, ベトナム, ミャンマー, インド, スリランカ, ウズベキスタン	800人 (20~59歳)	857 (58.8%)	面接法
East Asia Value Survey (東アジア価値観国際比較調査)	日本, 韓国, 台湾, 中国(北京, 上海), 香港, シンガポール	1,200人 (20歳以上)	787 (65.6%)	面接法
Asian Barometer, East Asia Barometer(アジアン・バロメーター、東アジア・バロメーター)	日本, 韓国, 台湾, 中国, 香港, フィリピン, タイ, インドネシア, モンゴル <sup>3)</sup>	1,200人 (20歳以上)	- (-)	面接法

注: 1) 回答者数・調査方法は日本でのものであり、他の各国・地域では異なることがある。

2) 下線は、EASS-2006に参加している国・地域。

3) 東アジア・バロメーターウェブサイトによる。アジアン・バロメーターウェブサイトでは、上記9カ国・地域のほかに、シンガポール・ベトナム・カンボジアを加えた12カ国になっている。

資料: アジア・バロメーター、アジアン・バロメーター、東アジア・バロメーター、東アジア価値観国際比較調査、ISSP、世界価値観調査各ウェブサイトより筆者作成。

表 2 東アジアにおける国際比較調査(2)

調査名	調査企画・運営主体	研究代表者 [ 日本での研究代表者 ]	日本での調査受託組織
World Values Survey, 4th Wave	World Values Survey Executive Committee	[ 山崎聖子(電通総研主任研究員) ]	日本リサーチセンター
ISSP2003	The ISSP Secretariat	[ 荒牧央(NHK放送文化研究所研究員) ]	中央調査社
AsiaBarometer 2003	中央大学猪口研究室	猪口孝(中央大学教授)	日本リサーチセンター <sup>1)</sup>
East Asia Value Survey	統計数理研究所	[ 吉野諒三(統計数理研究所教授) ]	新情報センター
Asian Barometer, East Asia Barometer	Asian Barometer Core Partners	[ 池田謙一(東京大学大学院人文社会系研究科教授) ]	中央調査社

注：1) 2004 年からは新情報センター。

資料：アジア・バロメーター、アジアン・バロメーター、東アジア・バロメーター、東アジア価値観国際比較調査、ISSP、世界価値観調査の各ウェブサイトに基づき筆者作成。

## 2. 世界価値観調査(World Values Survey)

「世界価値観調査」は、ミシガン大学教授 Ronald Inglehart を中心とする各国・地域の研究グループにより、世界各国・地域の社会文化・政治的变化を捉えることを目的とした国際比較調査プロジェクトである。1981年に第1回調査が実施されて以来、これまでに5回の調査が実施されており、このうち第4回までの調査については、すでに調査の実施状況およびデータが公開されている。表3は各回の調査実施状況、表4は東アジアにおける調査概要を示したものである。また、調査データはICPSR (Inter-university Consortium for Political and Social Research)に寄託されているほか、世界価値観調査のウェブサイトでは、SPSS形式による第1回から第4回調査までの個別調査データおよび累積データセットをダウンロードすることができる。

表 3 世界価値観調査の実施状況

	調査実施年	国・地域の数	東アジア諸国・地域の参加状況
第1回	1981	12	日本・韓国・中国
第2回	1989-1992	37	日本・韓国・中国
第3回	1995-1998	91	日本・韓国・台湾
第4回	1999-2002	96	日本・韓国・中国

注：調査実施年の表記の仕方には、資料によって若干の食い違いがある。

資料：世界価値観調査ウェブサイトより筆者作成。

表 4 東アジアにおける世界価値観調査の手法

	日本 (2000)	韓国 (2000)	台湾 (1995)	中国 (2000) <sup>1)</sup>
回答者数	1,362 (18歳以上)	1,200 (18歳以上)	780 (18歳以上)	1,000 (18~65歳)
抽出方法	多段無作為抽出法	確率比例抽出法	層化三段無作為抽出法 <sup>2)</sup>	確率比例抽出法
実査の方法	郵送法	面接法	面接法	面接法

注：1) 中国ではチベット、新疆ウイグル両自治区の省都およびその近郊を除く地域が抽出枠から除外されている。この地域の人口は中国全体の5.3%に相当するとされる(World Values Survey website)。

2) 世界価値観調査ウェブサイトの表記とは異なるが、台湾中央研究院社会学研究所・杜素豪研究員に確認。

資料：世界価値観調査ウェブサイトより筆者作成。

世界価値観調査の長所はその規模の大きさにある。表3にあるように、調査実施国・地域は回を追うごとに拡大しており、この中にはさまざまな経済水準・政治体制・宗教的背景等を有する国や地域が含まれる。とくに、アジア・アフリカ・旧ソ連諸国・中南米など、これまで社会調査データの入手が困難であった国や地域でも調査が実施されており、これらのデータは当該国・地域の研究者にとっても貴重なものである。また、調査票には家族・健康・環境・職業・政治・経済・宗教などさまざまな領域について対象者の価値観を探る設問が用意されており、第4回調査では設問項目は250近くにもなっている。

このように、世界価値観調査は世界の多様な国や地域に暮らす人々の価値観をさまざまな面で明らかにするものである。その反面、世界価値観調査にはいくつかの問題点も存在する。

まず、国や地域によって実際のサンプルの規模にばらつきがある。世界価値観調査は男女18歳以上1,000サンプルを回収することが基本であるが、第4回調査を例に挙げると、サンプル規模の最も大きいトルコでは3,401<sup>(1)</sup>、最小のプエルトリコでは720と、4倍以上の開きがある<sup>(2)</sup>。

このほか、世界価値観調査では各国・地域ごとにひとつの研究グループが調査を行うことになっているが、調査のスケジュールや抽出方法、集計仕様などは統一されていない。また、第4回調査までは各国・地域で同一の調査票を用いることになっていたが<sup>(3)</sup>、実際にはすべての国や地域において、設問がすべて尋ねられているわけではなかった。したがって、調査原票に盛り込まれたすべての設問について、各国・地域のデータが得られるわけではない。

加えて、東アジアの分析に関しては、表3に見られるとおり、日韓台が揃って調査を実施したことがない点が問題となる。また、真鍋ら(1996)によると、中国での調査に関して、英語調査票からの翻訳に関する問題が指摘されている。それによれば、アメリカ調査票の“Trade unions”(労働組合)と“lying in your own interest”(自分の利益のためにうそをつく)が、中国での調査票でそれぞれ「貿易組織」、「利息に頼って暮らす」と訳されている(真鍋ら, 1996:74)

これらの点を考慮すると、世界価値観調査のデータは、世界各国の比較分析を可能とするものであるが、無批判に用いることには危険が伴っており<sup>(4)</sup>、とくに東アジアにおける域内比較分析に用いるデータとしては限界があると言わざるを得ない。

### 3. ISSP

ISSPは、1984年に西ドイツ(当時)、アメリカ、イギリス、オーストラリアの4カ国で発足した国際比較調査研究グループである。その後参加国は増加し、2004年には39カ国で調査が実施されている。なお、東アジアでは日本が1992年に参加を認められ、1993年に調査を開始した。その後、2001年には台湾が、2002年には韓国が参加している(調査開始はそれぞれ2002年と2003年)。

ISSPの特徴の1つは、「国への帰属意識(National Identity)」、「政府の役割(Role of Government)」など、調査に当たって毎年単独のテーマを設定すること、そしてそれらのテーマは一定期間を置いた後に反復される点にある。こうすることで、国際比較が可能になると同時に、異時点間の比較も可能となる。2009年までの調査テーマおよび参加国・地域は、表5および表6のとおりである。

調査の実施にあたって厳密な規定がおかれている点もISSPの特徴である(*ISSP working principles*)。調査票は、調査の1年前にイギリス英語の原案が総会で決定され、これを各国で文化的に等質に翻訳して用いることとされている。調査票は毎年15分60問と定められており、新たな設問を挿入したり、順番を変更することは認められない。調査対象者は18歳以上(日本とロシアは16歳以上)で最低1,000人とされ、各国・地域を代表するサンプルを無作為に抽出することと定められている。調査の実施や調査データの送付については一定の期限内に行うものとされ、データを送付する際には抽出方法をはじめ調査概要についても詳細な報告が求められる。これとは別に、調査方法についての調査票(study monitoring questionnaires)に対する回答も必要である。回収状況や進行スケジュール、集計仕様などにばらつきがある世界価値観調査とは対照的である。なお、ISSPの調査データはドイツのデータアーカイブZA(Zentralarchiv für Empirische Sozialforschung)およびICPSRから公開されている。

表 5 ISSP の調査テーマおよび調査実施国・地域

年	調査テーマ (日本での調査テーマ)	調査実施国・地域	
		国・地域名	数
1985	Role of Government I	オーストラリア, オーストリア, イギリス, イタリア, アメリカ, 西ドイツ	6
1986	Social Networks I	オーストラリア, オーストリア, イギリス, ハンガリー, イタリア, アメリカ, 西ドイツ	7
1987	Social Inequality I	オーストラリア, オーストリア, イギリス, ハンガリー, イタリア, オランダ, アメリカ, 西ドイツ, スイス, ポーランド	10
1988	Family and Changing Gender Roles I	オーストリア, イギリス, ハンガリー, アイルランド, イタリア, オランダ, アメリカ, 西ドイツ	8
1989	Work Orientations I	オーストリア, イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, イタリア, オランダ, 北アイルランド, ノルウェー, アメリカ, 西ドイツ	11
1990	Role of Government II	オーストラリア, イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, イタリア, 北アイルランド, ノルウェー, アメリカ, 東ドイツ, 西ドイツ	11
1991	Religion I	オーストラリア, オーストリア, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, イタリア, オランダ, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ロシア, スロベニア, アメリカ	17
1992	Social Inequality II	オーストラリア, オーストリア, ブルガリア, カナダ, チェコスロバキア, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, イタリア, ニュージーランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ロシア, スロベニア, スウェーデン, アメリカ	17
1993	Environment I (環境)	オーストラリア, ブルガリア, カナダ, チェコ, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, イタリア, 日本, オランダ, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ロシア, スロベニア, スペイン, アメリカ	21
1994	Family and Changing Gender Roles II (女性の仕事と家族)	オーストラリア, オーストリア, ブルガリア, カナダ, チェコ, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, イタリア, 日本, オランダ, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ロシア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, アメリカ	23
1995	National Identity I (国への帰属意識)	オーストラリア, オーストリア, ブルガリア, カナダ, チェコ, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, アイルランド, イタリア, 日本, ラトビア, オランダ, ニュージーランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ロシア, スロバキア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, アメリカ	23
1996	Role of Government III (政府の役割)	オーストラリア, ブルガリア, カナダ, キプロス, チェコ, フランス, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル(ユダヤ人, アラブ人), イタリア, 日本, ラトビア, ニュージーランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ロシア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, スイス, アメリカ	24
1997	Work Orientations I (職業意識)	バングラデシュ, ブルガリア, カナダ, キプロス, チェコ, デンマーク, フランス, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, イスラエル(ユダヤ人, アラブ人), イタリア, 日本, オランダ, ニュージーランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ポルトガル, ロシア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, スイス, アメリカ	25
1998	Religion II (宗教意識)	オーストラリア, オーストリア, ブルガリア, カナダ, チリ, キプロス, チェコ, デンマーク, フランス, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, イタリア, 日本, ラトビア, オランダ, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ポルトガル, ロシア, スロバキア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, スイス, アメリカ	31

年	調査テーマ (日本での調査テーマ)	調査実施国・地域	
		国・地域名	数
1999	Social Inequality III (社会的不平等)	オーストラリア, オーストリア, ブルガリア, カナダ, チリ, キプロス, チェコ, デンマーク, フランス, ドイツ(旧東西), イギリス, ハンガリー, イスラエル, <u>日本</u> , ラトビア, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ポルトガル, ロシア, スロバキア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, アメリカ	27
2000	Environment II (環境)	オーストリア, ブルガリア, カナダ, チリ, チェコ, デンマーク, フィンランド, ドイツ, イギリス, アイルランド, イスラエル, <u>日本</u> , ラトビア, メキシコ, オランダ, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポルトガル, ロシア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, スイス, アメリカ	26
2001	Social Networks II (社会的ネットワーク)	オーストラリア, オーストリア, ブラジル, カナダ, チリ, キプロス, チェコ, デンマーク, フィンランド, フランス, ドイツ, イギリス, ハンガリー, イスラエル, イタリア, <u>日本</u> , ラトビア, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ロシア, スロベニア, 南アフリカ, スペイン, スイス, アメリカ	28
2002	Family and Changing Gender Roles III (家庭と男女の役割)	オーストラリア, オーストリア, ブラジル, ブルガリア, チリ, キプロス, チェコ, デンマーク, フィンランド, フランドル(ベルギー), フランス, ドイツ, イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, <u>日本</u> , ラトビア, メキシコ, オランダ, ニュージーランド, 北アイルランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ポルトガル, ロシア, スロバキア, スロベニア, スペイン, スウェーデン, スイス, <u>台湾</u> , アメリカ	34
2003	National Identity II (国への帰属意識)	オーストラリア, オーストリア, ブルガリア, カナダ, チリ, チェコ, デンマーク, フィンランド, フランス, ドイツ, イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, <u>日本</u> , ラトビア, オランダ, ニュージーランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ポルトガル, ロシア, スロバキア, スロベニア, 南アフリカ, <u>韓国</u> , スペイン, スウェーデン, スイス, <u>台湾</u> , ウルグアイ, アメリカ, ベネズエラ	34
2004	Citizenship (シチズンシップ)	オーストラリア, オーストリア, ブラジル, ブルガリア, カナダ, チリ, キプロス, チェコ, デンマーク, ドミニカ共和国, フィンランド, フランドル(ベルギー), フランス, ドイツ, イギリス, ハンガリー, アイルランド, イスラエル, <u>日本</u> , ラトビア, メキシコ, オランダ, ニュージーランド, ノルウェー, フィリピン, ポーランド, ポルトガル, ロシア, スロバキア, スロベニア, 南アフリカ, <u>韓国</u> , スペイン, スウェーデン, スイス, <u>台湾</u> , ウルグアイ, アメリカ, ベネズエラ	39

注：下線は、EASS-2006に参加している国・地域。

資料：ISSPウェブサイトより筆者作成。

表6 ISSPの調査テーマ(2005年以降・対象国・地域は未公表)

年	調査テーマ
2005	Work Orientations III
2006	Role of Government IV
2007	Leisure Time and Sports
2008	Religion III
2009	Social Inequality IV

資料：ISSPウェブサイトより筆者作成。

ISSPはこのような特徴を持つ一方で、課題も指摘される。まず、国や地域によって調査の実施方法が面接法・郵送法・配布回収法などと異なっており、抽出方法や補助サンプルの使用の仕方にも相違

が見られる。とくに補助サンプルについては、全く使用していない国や地域がある一方、フィリピンなどでは調査までに最終的に対象者となった人の10倍以上もの人に接しているといわれている。また、フランスでは1999年調査の際、調査対象者11,015人に対して有効回答数が1,889人しかなかった例もあり（荒牧・小野寺，2004；小野寺，2003b）。これらの国のデータを利用するに当たっては、注意が必要である。

東アジア各国・地域の比較分析に際しては別の問題もある。すでに見たように調査実施国・地域として日本・韓国・台湾がそろったのは2003年のことであり、中国ではこれまで一度も調査が実施されていない<sup>5)</sup>。さらに、参加国・地域の多くがヨーロッパ諸国であることから、調査票が欧米的価値観に基づくものになっているという指摘もある（小野寺，2003b）。2004年の調査実施国・地域を見ても、非キリスト教圏では日本・韓国・台湾・イスラエルのみである。韓国・台湾が未加入であった1998年に実施された宗教をトピックとする調査の際には、日本が日本人の宗教観や宗教活動の実態を説明する必要があったという。

以上のことから、少なくとも既存の調査データに関しては、東アジア内の国・地域を比較するために用いるのは難しいのが実状である。実際 ISSP を用いた国際比較研究は日本でも報告されているが、日本と欧米諸国との比較（小野寺，2000；2001；2003a）や、日本を含むすべての国・地域のデータの比較分析となっている（真鍋，1999）。

ISSP の将来について、NHK 放送文化研究所で ISSP に携わってきた小野寺(2003b)は、「価値観の構造そのものが違う国があることを前提に、多様な価値観を取り込み、エリア間の価値観構造の違いを見るための調査を指向するべき」としたうえで、データの利用者にも価値観の違いに焦点を当てた分析を行うことを希望している（小野寺，2003b:27）。これは、今後も ISSP に多様な背景を持った国や地域が新たに加わり、調査票がそのような多様性を反映することを見越して述べているのであると思われる。同様のことはすでに多種多様な国が参加している世界価値観調査についても言えよう。換言すれば、価値観などの面において一定の共通性が想定される東アジアという領域内で比較分析を行おうとすれば、域内の特徴をとらえることができる国際比較調査を実施する必要があるといえる。次節以降ではそのような調査や、調査結果に基づく研究について見ていく。

#### 4. アジア・バロメーター (AsiaBarometer)

「アジア・バロメーター」は2003年以来、東・東南・南・中央アジアの各国・地域を対象として、2003年以降実施されている。調査は共通の調査票を用い、共通の調査フレームワークに基づいて実施されている。調査対象国・地域は年度ごとに異なっており、とくに2003年については日本・韓国を除き、調査対象地域のほとんどが各国の都市部に限られている。これまで実施された調査の概要については、表7および表8のとおりである。

表7 アジア・バロメーター調査対象国・地域および目標対象者数

年	調査対象国・地域	目標対象者数
2003	日本, 韓国, 中国, タイ, マレーシア, ベトナム, ミャンマー, インド, スリランカ, ウズベキスタン (10カ国)	20~59歳 800人
2004	日本, 韓国, 中国, ブルネイ, カンボジア, インドネシア, ラオス, マレーシア, ミャンマー, フィリピン, シンガポール, タイ, ベトナム (13カ国)	20~59歳 800人
2005	アフガニスタン, バングラデシュ, ブータン, インド, カザフスタン, キルギス, モルジブ, モンゴル, ネパール, パキスタン, スリランカ, タジキスタン, トルクメニスタン, ウズベキスタン (14カ国)	20~59歳 800人
2006	日本, 韓国, 台湾, 中国, 香港, シンガポール, ベトナム (7カ国・地域)	20~59歳 1,000人

注：下線は、EASS-2006に参加している国・地域。

資料：アジア・バロメーターウェブサイトより筆者作成。

表 8 日本・韓国・中国におけるアジア・バロメーター2003 の調査方法

	日本	韓国	中国
回答者数	857 (回答率 58.8%)	800	800
抽出方法	層化二段無作為抽出法	層化二段無作為抽出法	北京、上海、広州、重慶、西安、南京、大連、青島 8 都市それぞれで無作為に抽出した 10 地点から 10 人を等間隔で選出
実査の方法	留置法	面接法	面接法

資料：アジア・バロメーターウェブサイトより筆者作成。

アジア・バロメーターの特長としては、アジアに暮らす人々の日常生活および、それらとアジア各国の政治制度・経済市場との関係に焦点を当てている点が挙げられる（猪口，2005a:11；アジア・バロメーターウェブサイト）。2003 年度の調査票を見ると、一般的信頼感や帰属意識、政治・選挙への意識に関する設問のみならず、社会基盤や日用必需品・サービスへのアクセス、耐久消費財の所有状況など、対象者の生活に関する具体的な設問が多く含まれており、この点はこれまで見てきた世界価値観調査や ISSP と大きく異なっている。調査は無作為抽出法によって選ばれた対象者に対し、面接法で実施するのが基本であるが、各国・地域の事情に応じて、電話による聴取が用いられる場合もある。なお、2003 年の日本での調査は留置法で実施されている（猪口ほか編，2005）。

アジア・バロメーターのデータを用いた日本での研究としては、以下のものがある。

真鍋(2004)はアジア・バロメーターについて次の 2 点から肯定的評価を与えている。1)これまで西欧中心であった国際比較調査がアジアに焦点を当てたことで、アジアの現実やそこから生まれた仮説が科学的知見を生み出し、アジアの人々の意識の多様性を理解することが可能になる点と、2)既成概念や自明とされがちな概念の再検討を促す点である。その上で、2003 年度の調査項目を用い、上水道・電気・都市ガスの普及状況（【資料 A】Q1 を参照）やその経路に関する分析を行い、さらにウェル・ビーイング（well-being；使用設問 Q4, Q5a～o, Q6）、一般的信頼感(Q9～Q11)および機関への信頼(Q21a～r)の相関分析、投票行動(Q24a, b)、政治に対する意識(Q25a)、政治的シニシズム(Q25b～g)、国への誇り(Q15-2)に関する相関分析を行い、政治的行動と国への誇りとの相関が国によって 2 種類に分かれることを明らかにしている。ひとつは、国への誇りが投票頻度および投票義務感と正の相関を示し、かつ政治的シニシズムと負の相関を示す国々であり、もうひとつはそのような相関関係が存在しない国々である。アジア・バロメーター2003 に参加した東アジアの国々のうち、日本・韓国・中国は前者に含まれる。

また真鍋(2006)は、同年および 2004 年の調査票のうち、幸福感に関する設問(Q4)と満足感に関する設問(Q5)を用い、「幸福」と「満足」という概念に関する既存の理論や命題についての検証を行った。その結果によると、1 人当たりの GNP が高い国より低い国の方において幸福感が高くなる例があり、幸福感が経済発展によって完全に決定されるわけではないことが見出された。このほか、幸福と満足との相関が弱いこと、収入は回答者の年齢が上がるにつれて増加するものの、収入への満足感は低下すること、また収入と満足感の対応は必ずしも強いものではないこと、そして日韓中 3 力国で「社会的安全性」、「環境」、「社会福祉制度」、「民主主義制度」が 1 つの因子として検出されることが主張された。

猪口(2005b)は、近年しばしば話題にされる「東アジア共同体」について議論を整理し、東アジア共同体形成の駆動力として、1)経済的な結びつきを軸とする「機能的統合論」、2)地域的アイデンティティ論、3)中産階級推進者論、4)安全保障再編成論、5)民主主義論の 5 つを提示した。その上で、それらの議論に対してアジア・バロメーターが域内一般市民の意識を示すデータを示すことで、一定の論拠や反証を提供しようとしているものの、東アジア共同体像を具体的に描くことは今後の課題としている。

このような研究のほかに、2003 年度調査について、日本語・英語双方によるソースブックが編纂さ

れている（猪口ほか編，2005；英語版は Inoguchi, et. al., 2005）。ここでは各国の 2003 年度調査で対象としている 10 カ国の調査概要および調査票、調査データの集計結果が収録され、調査結果についてそれぞれ検討がなされている。

このように、アジア・バロメーターは、アジアに特化した国際比較調査として、アジアにおける市民レベルの日常生活や意識についてさまざまなデータを提供し、分析を可能とするものである。ただし、河東(2006)がソースブックへの書評で指摘しているように、調査としての課題がないわけではない。

まず、政治に関する設問の一部は、回答者および当局の警戒を回避するために、表現が多義的になっている。例えば、Q20「次の各国があなたの国に良い影響を与えていると思いますか」という設問では、影響を政治、経済面、文化面のどの面で見るとよいかによって回答が異なる恐れがある。また園田(2005)にもあるように、社会主義および一党独裁体制下の市民意識を探る場合は、回答者が党员であるかどうかなどの設問を調査票に加えておくことが望ましい。さらに、当局による監視が強い国では、質問によっては回答が当局の意向を汲んだものになるほか、2003 年の調査のように政治に関する設問が除外される可能性がある点にも注意が必要である。

### 5. 東アジア価値観国際比較調査 (East Asia Value Survey)<sup>(6)</sup>

統計数理研究所は、1971 年にハワイの日系人調査を開始して以来、主に国民性や文化をテーマとしたさまざまな国際比較調査を行ってきた。このうち「東アジア価値観国際比較調査」は、世界価値観調査への批判から「アジアの調査はアジア人の視点から遂行すべきである」(吉野, 2005a:143)との問題意識の下に、日本・韓国・台湾・中国(北京・上海・香港)・シンガポールを対象として、東アジア諸国・地域の人々の意識構造や価値観、とくに「信頼感」に焦点を当てて企画された調査である。

調査は 2002 年 10 月から 2003 年 3 月にかけて実施されている。表 9 にみられるように、対象者の年齢、標本数、また実際の回答者数は調査国(地域・都市)により大きく異なっている。

表 9 東アジア価値観国際比較調査概要

調査国・地域	対象者	抽出方法	標本数	回答者数 (回答率)
日本	20 歳以上の男女日本人	層化二段無作為抽出法	1,200	787(65.6%)
韓国	韓国全国に居住する満 20 歳以上の国民	割当法	-	1,006
台湾	台湾在住の満 20 歳以上の国民	層化三段無作為抽出法 <sup>1)</sup>	1,800	734
中国(北京)	18 歳以上の成人	多段無作為抽出法	3,633 <sup>2)</sup>	1,062(29.2%)
中国(上海)	18 歳以上の成人	多段無作為抽出法	1,915	1,052(54.9%)
中国(香港)	香港、マカオ、台湾を含む中国に 5 年以上居住し、現在香港に居住する 18 歳以上の成人	多段無作為抽出法	3,000	1,057
シンガポール	シンガポール全国に居住する 20 歳以上の国民	層化二段無作為抽出法	-	1,037

注：1) 東アジア価値観国際比較調査ウェブサイトの表記とは異なるが、台湾中央研究院社会学研究所・杜素豪研究員に確認。

2) 予備標本を含む。

資料：東アジア価値観国際比較調査ウェブサイト、吉野[2006]を基に筆者作成。

東アジア価値観国際比較調査の結果を用いた分析は、統計数理研究所の研究者を中心にすでにくつか出されている。

まず、吉野(2005b)の「信頼感」の解析では、従来の社会システムの崩壊に伴い、従来のシステムに依存した「信頼感」が崩壊する一方、新たな信頼のシステムが構築されつつあると仮定している。そして、一般的信頼感(【資料 B】問 26~28 を参照)、社会制度や組織などへの信頼感(問 41a~j)

法意識（問 35, 36）、社会的価値観（問 23, 50）の国際比較を行っている。分析に際しては、東アジア価値観国際比較調査のデータを比較するだけでなく、「日米欧 7 개국調査」<sup>(7)</sup>のデータを用いて欧米との比較も行っている。その結果に基づいて、「親孝行」など人間関係の基本的価値観（家族関係など）が普遍的に存在することを指摘している。さらに、この価値観に基づいて、国際相互理解や、従来とは異なる新たな社会システムの下で国富と信頼感が相補的に発展する「富国信頼」を提唱した。

鄭(2005)は、中国人・日本人・韓国人の伝統的価値観が、性別・年齢層別に变化しているか、あるいは変化していないのかを分析し、価値観の構造の異同について検討を行った。具体的には、家庭・婚姻観(問 3, 13, 19, 20)、ジェンダー選好性(問 42a, b)、儒教思想の価値観(問 50)についての回答を分析の対象としている。その結果から鄭は、中国本土では伝統的価値観が衰退している一方、香港・台湾では現在でも伝統的価値観が根強く残っているとしている。また日本では、伝統的な価値観をとどめながら、欧米の思想を受け入れるという二面性が見られること、韓国では、安定した家庭が重視され、男性優位的な伝統的価値観が残存していることを明らかにした。

三好・吉野(2005)は、「尊敬する職業」と「実際につきたい職業」に関する自由記述設問(問 39a, b)への回答を基に、日本・中国・台湾・韓国における職業観の分析を行った。その結果、「尊敬する職業」については、いずれの国・地域でも「教師」「医者」が 1 位と 2 位を占めた。また、「実際につきたい職業」では、日本で 1 位に公務員が、韓国で 2 位に「独立企業経営者」が入ったほかは、すべての国・地域において 1 位と 2 位が「教師」「医者」であった。このことから、日本・中国・台湾・韓国での職業観の比較において、これらの回答傾向の分析が重要となることを主張した。

角田・鈴木(2006)は、回答者の「一番大切なもの」を自由回答で尋ねる設問(問 38)に着目し、回答の傾向や特徴を分析した。彼らは、回答の内容を「生命・健康・自分」「家族」「愛情・精神」「その他」「分からない・無回答」に分類した。その結果、日本と韓国では「家族」が、台湾・北京・上海・香港では「生命・健康・自分」が最も多かった。また彼らは、家族、仕事、人間関係など、生活領域における 7 つの項目について、重要性を 7 段階で尋ねる設問(問 12)についても検討している。評価 7 の割合が最も多かったのは、どの国・地域においても「あなた自身の家族や子供」であり、次に多いのが「両親、兄弟、姉妹、親戚」、その次が「職業や仕事」であった。その一方で、シンガポールでは「宗教」に評価 7 を与えた人々の割合は 40.1%なのに対して、日本では 8%、「政治」については、韓国では 21%なのに対し香港では 3%など、項目によっては回答傾向が異なることが明らかとなった。

林(2006)は、宗教観や宗教的感情についての比較分析から、日本人にとっての宗教の意味の解明を試みた。信仰の有無(問 31a)と「宗教的な心」が大切かどうかを問う設問(問 32)の集計結果を比較したのち、先祖を尊ぶか(問 1)、靈魂や死後の世界の存在を信じるか(問 11b~c)、健康状態(問 5)、家庭や生活への満足感(問 13, 14)、科学観(問 29b~d)、「宗教的な心」が大切かどうか(問 32)、親への態度(問 49a, b)などへの回答についてのパターン分類を行っている。その結果日本人では、信仰は持たないが「宗教的な心」は大切であるとする人が多い<sup>(8)</sup>のに対し、韓国・台湾では信仰を持ち「宗教的な心」が大切であるとする人、上海・北京では信仰を持たず「宗教的な心」も大切ではないとする人が多いことが明らかとなった。このほか、日本では信仰の有無と先祖を尊ぶことと関連が強く、「宗教的な心」の大切さや、靈魂や死後の世界の存在を信じるという宗教的な関心を表す項目と、健康・家庭・生活への満足度との関連が高いことが明らかとなった。

星野(2006)は、ソーシャルキャピタルとしての法意識(問 34)・規範意識(問 35, 36)・契約観(問 24a, b, 問 55)および一般的信頼感(問 26~28)に関する分析を行った。分析では、これらの意識が回答者の属性とどのように関係しているのか、またこれらの意識が相互にどのように関連しているのかに焦点を当てている。その結果、北京・上海では学歴や階層帰属意識と信頼感が関連しているものの、他の国や地域ではそのような関係がないことが明らかになった。また、一般的信頼感は、中国では法意識および規範意識と相関<sup>(9)</sup>し、台湾では規範意識および契約観と、日本では法意識と相関があることが明らかになった。

松本(2006)は、東アジア全体および各国・地域における社会制度・組織への信頼(問 41)についての

因子分析や、制度への信頼と一般的信頼感(問 26~28)との関係についての分析を行った。その結果、東アジアで完全に同質とは断定できないものの、制度への信頼の共通因子として、メディア・行政・立法・司法への「体制的信頼」と、宗教団体・NGO・NPO・社会福祉施設・国連への「市民的信頼」という2つが存在する可能性があることを指摘している。また、制度への信頼を一般的信頼感で説明するモデルの適合性が十分に得られなかったことから、制度への信頼の中に一般的信頼感とは別に構築される部分が存在しており、これについて研究する必要があると主張している。

山岡(2004; 2005)は、東アジアの国・地域における「健康感」の特徴と、社会・文化要因との関連についての検討を行った。この研究では、「健康感」を自覚的健康度(問4)<sup>(10)</sup>と健康満足度(問5)という二つの側面からとらえた上で、「健康感」と生活満足度(問13, 14)、一般的信頼感(問26, 28)、不安感(問10a~c)・科学観(問25a)および社会階層(問6)との関係を分析している。その結果、自覚的健康度が、不安感と生活満足度と高い関連を有すること、また一般に男性よりも女性の方が、健康不満足を訴える割合が高く、自覚的健康度が多い(自覚症状を訴える平均個数が多い)ことが明らかとなった。

鄭・吉野・村上(2006)は、東アジアの人々の環境意識の分析を行った。具体的には、各国・地域における自然観(問21)および環境観(問37)を比較し、健康満足感(問5)、生活満足感(問14)、信頼感(問26, 問28)、宗教心(問31a, 32)科学技術観(問41j)の性別・年齢・学歴などとの関連を分析している。これらの分析から、東アジアの中では中国が「自然を征服する」という意見を選ぶ傾向が強い点や、東アジア全般の傾向として、高年齢層、低学歴層、低収入層は「自然に従う」より「自然を征服する」という意見を支持する点を指摘している。また、国・地域によって自然観・環境観の要因は異なっており、すべての国・地域に共通する要因がないことを示している。

山岡・李(2006)は、韓国と台湾において「東アジア価値観国際比較調査」とほぼ同時期に、共通の手法で実施された「健康と文化調査」のデータと、「東アジア価値観国際比較調査」のデータを基に、国際比較調査データの安定性の検証を行った。この研究では、双方の調査に共通する設問(問3, 4, 6, 10, 11a~g, 13, 14, 26~28, 29a~c, 問41a, c, j, 問50a~g)の回答結果が比較されている。その結果、健康感や信頼感などの質問については回答比率の違いが少なく、パターン構造も一致していたことなどから、調査結果の信頼性は高いと判断している。

以上のように、東アジア価値観国際比較調査のデータはさまざまな視点から分析されており、日本人の国民性や東アジアの人々の意識を探る上で貴重な知見を提供している。ただし、個票データは公開されておらず(2007年1月時点)今後の公開が待たれる。さらに、中国での調査は、北京・上海の2箇所(香港を含めても3箇所)でしか実施されていない。統計数理研究所では、2002年から2003年にかけて杭州と昆明でも調査を実施しており、先に紹介した研究ではそれらの結果も用いられている。とはいえ、これらのデータを加えても、中国全土を代表しているとは言いがたい。

## 6. おわりに - EASS 2008 に向けて -

本稿では、東アジアを対象とした国際比較調査の方法と分析結果についてレビューを行った。まず、東アジアを含む世界規模の調査を行っている「世界価値観調査」およびISSPについて検討した。これらの調査においては、東アジア各国・地域は文化的に一括りにされることが多い。例えば世界価値観調査のウェブサイトでは、日本・韓国・台湾・中国が「儒教的」(Confucian)というグループにまとめられている<sup>(11)</sup>。東アジアに住むわれわれとしては、東アジアの域内における類似性と差異に関心がある。価値観などの面において一定の共通性が想定される東アジアという領域内で、比較分析を行おうとすれば、域内の特徴をとらえることができる設問を組み込んだ国際比較調査を実施する必要がある。そこで本稿では、東アジアに特化した国際比較調査として、日本の研究機関が中心となって実施している「アジア・バロメーター」および「東アジア価値観国際比較調査」、さらにそれらの結果に基づく研究についてより詳細に検討した。

本稿を結ぶにあたって、東アジアに特化した国際社会調査として、EASSが果たすべき役割や意義を

考察しておきたい。前述したとおり、EASS では 2008 年に「文化とグローバリゼーション」をテーマとする調査を予定している。これまでの東アジアにおける国際社会調査においては、文化はテーマとして扱われていたわけではない。「アジア・バロメーター」では人々の生活水準や社会・経済・政治制度が主題であり、「東アジア価値観国際比較調査」では信頼感が主題であり、いずれも域内における文化や、文化へのグローバリゼーションの影響という問題を正面から取り扱ってはいない。ISSP では、1995 年および 2003 年に実施された「国への帰属意識」に関する調査において、グローバリゼーションという視点を組み込んではいないものの、東アジアの文化との関係についての検討はなされていない。したがって、EASS 2008 では、東アジア共通のものとしてされる文化的特徴やそれらの実践、あるいは各国固有とされる文化的産物の受容などについて調査することで、ともすれば自明のものとしてされがちであった東アジア各国・地域の文化の共通点や相違点を明らかにすることが求められる。

#### [注]

- (1) トルコでは第 4 回調査の期間に調査が 2 度実施されており、もう一方を合わせると回答者数は 4,607 になる。このほかにも、モロッコ、スペインでも、第 4 回調査の期間に調査を 2 度実施している。
- (2) 山崎(2004)によると、第 2 回調査でのサンプルサイズは最も多い南アフリカで 2,736、最も少ない北アイルランドで 304 となっている。
- (3) 第 5 回調査では、非 OECD 加盟国と OECD 加盟国で調査票が異なっており、さらに後者では A 票・B 票の 2 種類が用いられることになっている。
- (4) 上記の問題を解決した上で世界価値観調査のデータを利用するためには、関西学院大学真鍋一史教授を中心とするグループの研究が有益である。とくに東アジア諸国のデータに関しては、真鍋ほか(1996;1997)を参照されたい。
- (5) 荒牧・小野寺(2004)、小野寺(2003b)では、中国からは毎年参加希望が出された時期があったが、総会での投票で参加が認められなかったとされている。ただしその理由については触れられていない。
- (6) 東アジア価値観国際比較調査開始の背景については、吉野(2004; 2005a)、鄭・吉野(2003)を参照。
- (7) 7 カ国国際比較調査は、統計数理研究所が 1985 年から 1994 年にかけて日本、イギリス、フランス、西ドイツ、米国、オランダおよびイタリアで実施した調査である (<http://www.ism.ac.jp/~yoshino/arito/>)。
- (8) ただし、統計数理研究所が実施している「日本人の国民性調査」データでは、20 歳代で「信仰なし」かつ「宗教的な心は大切」とする層が 80 年代から 90 年代にかけて減少している(林, 2006)。
- (9) 星野は中国本土に相関があると単純にまとめているが、相関係数の符号は北京では正、上海では負となっている点(星野, 2006 の表 4 を参照)に注意が必要である。
- (10) 「自覚的健康度」とは、頭痛・背中痛などの自覚症状を訴える平均個数を指す(山岡, 2005)。
- (11) Inglehart-Welzel Cultural Map of the World in the World Values Survey website.

#### [参考文献]

- 荒牧央・小野寺典子, 2004, 「ISSP 国際比較調査の概要とデータについて」真鍋一史編, 2004, 『国際比較研究のフロンティア』関西学院大学社会学研究科:81-90.
- 林文, 2006, 「宗教と素朴な宗教的感情」『行動計量学』33(1):13-24.
- 星野崇宏, 2006, 「認知的ソーシャルキャピタルとしての法意識・規範意識・契約観と対人信頼感の関連 東アジア価値観国際比較調査データから」『行動計量学』33(1):41-53.
- 池田謙一, 2004, 「国際比較データ利用の意義」真鍋一史編, 2004, 『国際比較研究のフロンティア』関西学院大学社会学研究科:61-64.
- 猪口孝, 2002, 「アジア・バロメーターの設立を目指せ 地域世論調査が拓く学術・ビジネスの可能性」『中央公論』2002 年 7 月号:150-155.
- 猪口孝, 2005a, 「アジア・バロメーター: 目的・射程・効果」猪口孝・ミゲル・バサネズ・田中明彦・ティムール・ダダバエフ編, 2005, 『アジア・バロメーター』明石書店:11-28.

- 猪口孝, 2005b, 「アジア・バロメーターにみられる共同体意識」『外交フォーラム』2005年10月号:56-61.
- 猪口孝・ミゲル・バサネズ・田中明彦・ティムール・ダダバエフ編著, 2005, 『アジア・バロメーター 都市部の価値観と生活スタイル アジア世論調査[2003]の分析と資料』明石書店.
- Inoguchi, Takashi, Miguel Basáñez, Akihiko Tanaka and Timur Dadabaev (eds.), 2005, *Values and Life Styles in Urban Asia: A Cross-Cultural Analysis and Sourcebook Based on the AsiaBarometer Survey of 2003*, Mexico City: Siglo XXI Editores.
- ISSP Working Principle, downloaded from ISSP website.
- 河東哲夫, 2006, 「[書評]猪口孝・ミゲル・バサネズ・田中明彦・ティムール・ダダバエフ編著[2005]『アジア・バロメーター 都市部の価値観と生活スタイル アジア世論調査[2003]の分析と資料』」『アジア研究』52(1):102-106.
- 真鍋一史, 1999, 「ナショナル・アイデンティティの構造 ISSP 国際比較調査のデータ解析」『関西学院大学社会学部紀要』82:145-156.
- 真鍋一史, 2004, 「アジア・バロメーターのデータ解析 方法論的検討と探索的データ解析」『関西学院大学社会学部紀要』97:1-24.
- 真鍋一史編, 2004, 『国際比較研究のフロンティア 文化的多様性の視座から』関西学院大学社会学研究科.
- 真鍋一史, 2006, 「アジアにおける幸福と満足の文化 アジア・バロメーター調査のデータ解析」『関西学院大学社会学部紀要』100:55-70.
- 真鍋一史・栗田真樹・劉志明・加藤敬子・李鍾煥, 1996, 「R.イングルハート(R. Inglehart)の「世界価値観調査(World Values Survey)データ」の二次的分析のための準備作業」『関西学院大学社会学部紀要』75:67-82.
- 真鍋一史・栗田真樹・加藤敬子, 1997, 「R.イングルハート(R. Inglehart)の「世界価値観調査(World Values Survey)データ」の二次的分析のための準備作業(2)」『関西学院大学社会学部紀要』76:157-204.
- 松本渉, 2006, 「東アジアにおける組織に対する信頼感 国際比較のための信頼感の分析」『行動計量学』33(1):25-40.
- 三好美浩・吉野諒三, 2005, 「東アジアの職業観 日本・中国・台湾・韓国の比較」『行動計量学』32(2):173-189.
- 小野寺典子, 2000, 「人々は政府に何を期待しているか～ISSP 国際比較調査から～」『放送研究と調査』50(4):14-29.
- 小野寺典子, 2001, 「日本人は“会社人間”か～ISSP 国際比較調査「職業意識」から～」『放送研究と調査』51(8):90-105.
- 小野寺典子, 2003a, 「平等社会のイメージと実感のずれ～ISSP 国際比較調査「社会的不平等」にみる日本人の意識～」『放送研究と調査』53(1):56-71.
- 小野寺典子, 2003b, 「ISSPの国際調査」『よるん』92:18-27.
- 園田茂人, 2005, 「ベトナム・発展途上にあるグローバル化の下での社会生活」猪口孝・ミゲル・バサネズ・田中明彦・ティムール・ダダバエフ編, 2005, 『アジア・バロメーター』明石書店:127-138.
- 角田弘子・鈴木達三, 2006, 「「一番大切なもの」 東アジア国際比較調査データ分析からいくつかの話題」『行動計量学』33(1):1-12.
- 山岡和枝, 2004, 「健康と国民性」『学際』12:39-45.
- 山岡和枝, 2005, 「東アジアの人々の「健康観と関連する社会・文化要因: 「東アジア価値観調査」と「医療と文化調査」結果の分析」『行動計量学』32(2):191-199.
- 山岡和枝・李相倫, 2006, 「国際比較調査データの安定性についての検証 2003年度韓国と台湾における「健康と文化調査」および「東アジア価値観国際比較調査」データの比較」『行動計量学』31(2):125-135.
- 山崎聖子, 2004, 「世界価値観調査の概要とデータ利用の手引き」真鍋一史編, 2004, 『国際比較研究のフロンティア』関西学院大学社会学研究科:93-150.
- 米村恵子, 1998, 「「世界価値観調査」に見る生活価値観の国際比較」『統計』49(1):13-18.
- 吉野諒三, 2004, 「「国民性」の調査～計量的文明論の確立に向けて～」『学際』12:6-12.

- 吉野諒三, 2005a, 「東アジア価値観国際調査 文化多様体分析[CULMAN]に基づく計量的文明論構築に向けて」『行動計量学』32(2):133-146.
- 吉野諒三, 2005b, 「富国信頼の時代へ 東アジア価値観国際比較調査における「信頼感」の統計科学的分析」『行動計量学』32(2):147-160.
- 吉野諒三, 2006, 『東アジア価値観国際比較調査 「信頼感」の統計科学的分析』(平成 14~17 年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書).
- 鄭躍軍(Zheng, Yuejin), 2005, 「東アジア諸国の伝統的価値観の変遷に関する計量分析」『行動計量学』32(2):161-172.
- 鄭躍軍・吉野諒三, 2003, 「東アジア価値観国際調査に向けて 中国における意識調査のための標本抽出の実践的検討」『よろん』91:16-21.
- 鄭躍軍・吉野諒三・村上征勝, 2006, 「東アジア諸国の人々の自然観・環境観の解析 環境意識経営に影響を与える要因の抽出」『行動計量学』33(1):55-68.

URL

- アジア・バロメーター(英語・日本語) <https://www.asiabarometer.org/>
- アジアン・バロメーター(英語) <http://www.asianbarometer.org/>
- 東アジア・バロメーター(英語・中国語) <http://eacsurvey.law.ntu.edu.tw/>
- 東アジア価値観国際比較調査(日本語) <http://www.ism.ac.jp/~yoshino/ea/index.html>
- 統計数理研究所ウェブサイト国際比較調査データアーカイブ(日本語) <http://www.ism.ac.jp/~yoshino/>
- ISSP(英語) <http://issp.org>
- 世界価値観調査ウェブサイト(英語) <http://www.worldvaluessurvey.org/>

【資料A】アジア・バロメーター2003 設問（本稿で参照した設問のみ）

出典：アジア・バロメーターウェブサイト

Q1 あなたの家は次のような公共サービスを使えますか、使えるものを全てお知らせ下さい。(MA)

1. 上水道      2. 電気      3. 都市ガス      4. どれも使えない      5. 分からない

Q4 総合的に考えて、あなたは近頃幸せだと思いますか。(SA)

1. 非常に幸せ      2. どちらかという幸せ      3. どちらとも言えない  
4. あまり幸せではない      5. 非常に不幸せ      6. 分からない

Q5 次に挙げるような事柄について、あなたはどの程度満足しておいででしょうか。それぞれについて、あなたのお気持ちに最も近いものをお答え下さい。(それぞれ1つずつ)(SA)

(注：1 非常に満足 2 どちらかといえば満足 3 どちらともいえない 4 どちらかといえば不満 5 非常に不満 6 分からない を表示)

1      2      3      4      5      6

- a 住居
- b 友人関係
- c 結婚生活【既婚者のみ】
- d 生活水準
- e 世帯収入
- f 健康
- g 教育
- h 仕事
- i 近所付き合い
- j 社会の安全性
- k 環境状態
- l 社会福祉制度
- m 民主主義制度
- n 家族生活
- o 余暇

Q6 あなたの暮らし向きは、世間一般と比べてどの程度だと思いますか。(SA)

1. 上      2. やや上      3. 中      4. やや下      5. 下      6. 分からない

Q9 一般的に言って、たいいていの方は信用できると思いますか、それとも用心するに越したことはないとおもいますか。(SA)

1. たいいていの方は信用できる      2. 用心するに越したことはない      3. 分からない

Q10 たいいていの方は、他人の役に立とうとしていると思いますか、それとも自分のことだけ考えていると思いますか。(SA)

1. 他人の役に立とうとしている      2. 自分のことだけ考えている      3. 分からない

Q11 道に迷っている人を見かけたとき、あなたなら助けますか？(SA)

1. 必ず助ける      2. 他の誰も助けられないなら助ける      3. 助けられない可能性が高い      4. 分からない

Q15-2 【日本人】であることをどの程度あなたは誇りに思いますか。(SA)

1. 非常に誇りに思う      2. やや誇りに思う      3. あまり誇りに思わない  
4. 全く誇りに思わない      5. 分からない

Q21 あなたは次にあげるような機関や政府にどの程度信頼感をもっていますか。あなたのお考えに一番近いものをそれぞれ1つずつお答え下さい。分からない、考えたこともない場合は、そうおっしゃってください。(a ~ r それぞれの機関について1つだけ) (それぞれに SA)

(注: 1 非常に信頼感をもっている 2 やや信頼感をもっている 3 あまり信頼感をもっていない 4 全く信頼感をもっていない 5 わからない を表示)

1 2 3 4 5

- a 政府
- b 地方自治体
- c 軍隊
- d 法制度
- e 警察
- f 国会
- g 教育制度
- h 医療制度
- i 国内の大企業
- j 国内で営業している多国籍企業
- k 労働組合
- l マスコミ
- m NGO (環境保護や社会運動のための非営利組織) →
- n 宗教団体
- o 国際連合(国連)
- p WTO(世界貿易機関)
- q 世界銀行
- r IMF (国際通貨基金)

Q24 あなたは次に挙げるそれぞれの選挙にどのくらいの頻度で投票に行きますか。それぞれについて1つずつお答え下さい。(SA)

(注: 1 毎回投票する 2 大体投票する 3 時々投票する 4 めったに投票しない 5 投票したことがない 6 投票権がない 7 分からない を表示)

1 2 3 4 5 6 7

- a 国政選挙
- b 地方選挙

Q25 社会や政治についての次のような意見に、あなたは賛成しますか、反対しますか。あなたのお考えに最も近いものをそれぞれの意見について1つずつお知らせ下さい。(それぞれに SA)

(注: 1 強く賛成 2 賛成 3 どちらでもない 4 反対 5 強く反対 6 分からない を表示)

1 2 3 4 5 6

- a 市民は選挙で投票する義務がある
- b 国の政治を動かしている人の中には、不正をする人が沢山いる
- c 一般的に言って、自分のようなものには政府のすることを左右する力はない
- d 政治や政府のことは複雑過ぎて自分には何をやっているのか  
良く分からないことがある
- e 選挙では大勢の人々が投票するのだから、自分1人くらいが  
投票してもしなくても同じだ
- f 一般的に言って、国会議員は当選したら国民のことは考えなくなる
- g 政府の役人は自分のような市民が何を考えているかに注意を払わない

【資料B】東アジア価値観国際比較調査設問（本稿で参照した設問のみ）

出典：東アジア価値観国際比較調査ウェブサイト

問1 あなたはどちらかといえば、普通より先祖を尊ぶ方ですか、それとも普通より尊ばない方ですか。

1	2	3	8	9
普通より尊ぶ方	普通より尊ばない方	普通	その他（記入）	わからない

問2 子供がないときは、血のつながりがない他人の子供を、養子にとって家をつがせた方がよいと思いますか、それとも、つがせる必要はないと思いますか。

1	2	3	8	9
つがせた方がよい	つがせる必要はない	場合による	その他（記入）	わからない

問3 現在、一般的な家庭にとって望ましい子供の数は何人だと思えますか。

（ ）人 9 わからない

問4〔カード1〕ここ1ヶ月の間につきにあげるものに悩みましたか。（かかりましたか。）

	あり	なし
a. 頭痛・偏頭痛・頭が重い .....	1	2
b. 背中の痛み（肩こりや腰痛など） .....	1	2
c. いらいら .....	1	2
d. うつ状態（ゆううつになる、気がふさぐ） .....	1	2
e. 不眠症（よく眠れない） .....	1	2
	8	その他（記入）
	9	わからない

問5〔カード2〕あなたと同じ年の人と比べて、あなたの健康状態はいかがですか。

1	非常に満足している	4	満足していない
2	満足している	8	その他（記入）
3	あまり満足していない	9	わからない

問6〔カード3〕かりに現在の日本社会全体を、ここに書いてあるように5つの層に分けるとすれば、お宅はこのどれにはいると思えますか。

1	2	3	4	5	8	9
上	中の上	中の中	中の下	下	その他（記入）	わからない

問10〔カード6〕ときどき、自分自身のことや家族のことで不安になることがあると思えます。

あなたは、次のような危険について不安を感じるがありますか。

	非感 常 じ る に る	か感 な じ る に る	少感 し じ る は る	全感 く じ な い	そ の 他	わ な か い ら
a. まず、「重い病気」の不安はどの程度でしょうか。	1	2	3	4	8	9
b. では、「交通事故」についてはどうでしょうか。	1	2	3	4	8	9
c. では、「戦争」についてはどうでしょうか。	1	2	3	4	8	9

問 11〔カード 7〕次あげるものをあなたは「ある」または「存在する」と思いませんか。それぞれについてお答え下さい。(1つずつ 印)

	ある・存在する	あるかもしれない	ない・存在しない	わからない
a. 神や仏	1	2	3	9
b. 死後の世界	1	2	3	9
c. 霊魂(たましい)	1	2	3	9
d. 悪魔	1	2	3	9
e. 地獄	1	2	3	9
f. 天国や極楽	1	2	3	9
g. 宗教上の罪や罰(ばち)	1	2	3	9

問 12〔カード 8〕次あげる生活領域のそれぞれについて、あなたが重要だと思う程度に従って1～7の評価をつけてください。

	重要でない						重要	その他	わからない	(該当せず)
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
a. まず、「あなた自身の家族や子供」については どうですか。	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
b. では、「職業や仕事」についてはどうですか。	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
c. では、「自由になる時間とくつろぎ」については どうですか。	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
d. では、「友人、知人」については	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
e. では、「両親、兄弟、姉妹、親戚」については	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
f. では、「宗教」については	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
g. では、「政治」については	1	2	3	4	5	6	7	8	9	

問 13〔カード 9〕あなたは自分の家庭に満足していますか、それとも不満がありますか。

1	2	3	4	5	8	9
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	その他(記入)	わからない

問 14〔カード 10〕あなたの生活についておききします。ひとくちにいったあなたは今の生活に満足していますか、それとも不満がありますか。

1	2	3	4	5	8	9
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	その他(記入)	わからない

問 19 つぎのような考え方があります。

「家庭は、ここちよく、くつろげる、ただ1つの場所である」

というのですが、あなたはそう思いますか、そうは思いませんか。

1	2	8	9
そう思う	そうは思わない	その他(記入)	わからない

問 20〔カード 12〕 つぎの 3 つの意見の中で、どれが一番あなたの意見に近いですか。

- 1 離婚はすべきではない
- 2 ひどい場合には、離婚してもよい
- 3 二人の合意さえあれば、いつ離婚してもよい
- 8 その他（記入 \_\_\_\_\_）
- 9 わからない

問 21〔カード 13〕 自然と人間との関係について、つぎのような意見があります。あなたがこのうち真実に近い（ほんとうのことに近い）と思うものを、1 つだけ選んでください。

- 1 人間が幸福になるためには、自然に従わなければならない
- 2 人間が幸福になるためには、自然を利用しなければならない
- 3 人間が幸福になるためには、自然を征服していかなければならない
- 8 その他（記入 \_\_\_\_\_）
- 9 わからない

問 23〔カード 15〕 つぎのうち、大切なことを 2 つあげてくれといわれたら、どれにしますか。

- ありなし
- a. 親孝行、親に対する愛情と尊敬..... 1 0
  - b. 助けてくれた人に感謝し、必要があれば援助する .....1 0
  - c. 個人の権利を尊重すること..... 1 0
  - d. 個人の自由を尊重すること..... 1 0
  - 8 その他（記入 \_\_\_\_\_）
  - 9 わからない

（上の質問では、2 つの項目をあげてもらうこと）

問 24 a.〔カード 16〕 あなたが、ある会社の社長だったとします。その会社で、新しく職員を 1 人採用するために試験をしました。入社試験をまかせておいた課長が、「社長のご親戚の方は 2 番でした。しかし、私としましては、1 番の人でも、ご親戚の方でも、どちらでもよいと思いますがどうでしょうか」と社長のあなたに報告しました。あなたはどちらをとれ（採用しろ）といえますか。

- 1 1 番の人を採用するようという
- 2 親戚を採用するようという
- 8 その他（記入 \_\_\_\_\_）
- 9 わからない

b.〔カード 17〕 それでは、この場合 2 番になったのがあなたの親戚の子供でなくて、あなたが昔世話になった人の子供だったとしたら、あなたはどうしますか。（どちらをとれといえますか）

- 1 1 番の人を採用するようという
- 2 昔世話になった人の子供を採用するようという
- 8 その他（記入 \_\_\_\_\_）
- 9 わからない

問 26 たいいてい人は、他人の役にたとうとしていると思いますか、それとも自分のことだけ考えていると思いますか。

- 1 他人の役にたとうとしている
- 2 自分のことだけ考えている
- 8 その他（記入 \_\_\_\_\_）
- 9 わからない

問 27 他人は、機会があれば、あなたを利用しようとしていると思いますか、それともそんなことはないと思いますか。

- 1 他人は機会があれば利用しようとしていると思う
- 2 そんなことはないと思う
- 8 その他（記入 ）
- 9 わからない

問 28 たいいていの人には信頼できると思いますか、それとも、常に用心した方がよいと思いますか。

- |          |            |          |       |
|----------|------------|----------|-------|
| 1        | 2          | 8        | 9     |
| 信頼できると思う | 常に用心した方がよい | その他（記入 ） | わからない |

問 29〔カード 19〕つぎに読みあげる事柄についてあなたはどのように思いますか。それぞれについて、この中からお答えください。（a～d についてそれぞれ聞く）

a. 病気の中には近代医学とは別の方法で治療した方がよいものもある。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1 全くそのとおりだと思う | 4 決してそうは思わない |
| 2 そう思う        | 8 その他（記入 ）   |
| 3 そうは思わない     | 9 わからない      |

b. 科学技術が発展すれば、いつかは人間の心の中までも解明できる。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1 全くそのとおりだと思う | 4 決してそうは思わない |
| 2 そう思う        | 8 その他（記入 ）   |
| 3 そうは思わない     | 9 わからない      |

c. 今日（こんにち）、我々が直面している経済的、社会的問題のほとんどは科学技術の進歩により解決される。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1 全くそのとおりだと思う | 4 決してそうは思わない |
| 2 そう思う        | 8 その他（記入 ）   |
| 3 そうは思わない     | 9 わからない      |

d. 将来、科学技術の発展により、火星でも、地球と同じような生活ができるようになる。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1 全くそのとおりだと思う | 4 決してそうは思わない |
| 2 そう思う        | 8 その他（記入 ）   |
| 3 そうは思わない     | 9 わからない      |

問 31 a. 宗教についておききたいのですが、たとえば、あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか。

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1           | 2             |
| もっている、信じている | もっていない、信じていない |
|             | 関心がない         |

問 32 それでは、いままでの宗教にはかかわりなく、「宗教的な心」というものを、大切だと思いますか、それとも大切だとは思いませんか。

- |    |       |          |       |
|----|-------|----------|-------|
| 1  | 2     | 8        | 9     |
| 大切 | 大切でない | その他（記入 ） | わからない |

問 33 宗教について、こんな意見があります。

「宗教にはいろいろあり、それぞれ独自の教えを説いているが、そうした教えは、けっきょくは同じものだ」というのですが、あなたはこの意見に賛成ですか、それとも反対ですか。

- |    |    |          |       |
|----|----|----------|-------|
| 1  | 2  | 8        | 9     |
| 賛成 | 反対 | その他（記入 ） | わからない |

問 34 「法律はどんなときにも守るべきである」という意見と「目的が本当に正しいものだ」と確信がもてる時には、法律をやぶることもやむをえない」という意見があります。どちらの考えがあなたにぴったりですか。

- 1 「どんなときにも守るべきだ」という意見
- 2 「目的が正しい時には、法律をやぶることもやむをえない」という意見
- 8 その他（記入）
- 9 わからない

問 35〔カード 20〕契約書というものについて、あなたは次の A さんと B さんの意見のうち、どちらに近いですか。

A「契約書をとりかわすなどというのは、お互いに信頼し合っていない証拠だ。信頼し合っていれば、契約書など必要ない」

B「いくらお互いに信頼し合っている、契約は契約として、ちゃんと文書をとりかわしておく方がよい」

- 1 A の意見に近い
- 2 B の意見に近い
- 8 その他（記入）
- 9 わからない

問 36〔カード 21〕また、次の A さんと B さんの意見ではどちらに近いですか。

A「契約書をとりかわすときでも、契約などというものは形式的なものだから、できるだけ簡単にして、契約書の表現もできるだけゆずり融通がきくようなものにしておく方がよい」

B「契約書というものは、あとで解釈などをめぐってもめないように、できるだけこまかく具体的にキチッと決めておく方がよい」

- 1 A の意見に近い
- 2 B の意見に近い
- 8 その他（記入）
- 9 わからない

問 37〔カード 22〕環境保護と経済成長について、次の 2 つの意見がよく出されます。どちらがあなたの考えに近いですか。

- 1 経済がある程度悪化しても、環境保護が最優先されるべきだ
- 2 環境がある程度悪化しても、経済成長が最優先されるべきだ
- 8 その他（記入）
- 9 わからない

問 38 あなたにとって一番大切と思うものはなんですか。（もし回答者が複数あげた場合は、すべて記す）

（記入） 9  
分からない

問 39 a.あなたが一番尊敬する職業は何ですか。（もし回答者が複数あげた場合は、すべて記す）

（記入） 9  
分からない

b.では、ご自身が実際につきたいと思う職業は何ですか。（もし回答者が複数あげた場合は、すべて記す）

（記入） 9  
分からない

問 41〔カード 24〕あなたは、次にあげる組織や制度、事がらをどの程度信頼しますか。「非常に信頼する」「やや信頼する」「あまり信頼しない」「全く信頼しない」のいずれかでお答え下さい。(1つずつ 印)

	非常に 信頼する	やや 信頼する	あまり 信頼しない	全く 信頼しない	わからない
a. 宗教団体	1	2	3	4	9
b. 法律や裁判の制度	1	2	3	4	9
c. 新聞・テレビ	1	2	3	4	9
d. 警察	1	2	3	4	9
e. 国の行政	1	2	3	4	9
f. 国会	1	2	3	4	9
g. NPO・NGO(非営利団体や非政府組織)	1	2	3	4	9
h. 社会福祉施設	1	2	3	4	9
i. 国連	1	2	3	4	9
j. 科学技術	1	2	3	4	9

問 42 a. 今までの人生をふりかえって、もう一度やり直せるとしたら、男に生まれていた方がよかったですか。それとも女に生まれていた方がよかったですか。

- 1 男に生まれていた方がよかった  
 2 女に生まれていた方がよかった  
 8 その他(記入 )  
 9 わからない

b. それでは、これからの世の中を考えたとき、今、もう一度生まれ変われるとしたら、あなたは男と女のどちらに生まれてきたいと思いますか。

- 1 男に生まれてきたい      2 女に生まれてきたい      8 その他(記入 )      9 わからない

問 49 a.〔カード 31〕次のような場面を想像してください。あなたは幼いときに両親と死に別れ、近所に住んでいた田中さんに育てられました。そのおかげで、大学を卒業し、今では生活に余裕もできました。ところが、今、恩人の田中さんは病の床にふし、苦しんでいます。本人は知りませんが、医者にはあと3ヶ月の命と聞きました。しかし、特別な手術をすれば苦しみはとれ、回復できる可能性があると聞きました。身寄りもなく、経済的余裕もない田中さんを救うためには、あなたの全財産を使わなければなりません。あなたはどうすると思いますか。

- 1 全財産をなげうっても、ぜひ手術をしてもらおう  
 2 無理をせず、手術はあきらめる  
 8 その他(記入 )

b. 今の質問では、恩人の場合をききました。もし病気なのがあなたの本当のご両親のどちらかの場合だったらどうしますか。

- 1 全財産をなげうっても、ぜひ手術をしてもらおう  
 2 無理をせず、手術はあきらめる  
 8 その他(記入 )

問 50〔カード 32〕あなたは次のような伝統的な価値観についてどう思いますか。

	全くそのとおり だと思う	そう 思う	そうは 思わない	決してそう は思わない	その他	わから ない
a. 先祖を尊ぶべき	1	2	3	4	8	9
b. 長男は両親の面倒を見るべき	1	2	3	4	8	9
c. 妻は夫に従う	1	2	3	4	8	9
d. 親が反対する結婚はしない	1	2	3	4	8	9
e. 年上の人意見に従う	1	2	3	4	8	9
f. 家系を続かせるため息子は必要だ	1	2	3	4	8	9
g. 男性は外で働き、女性は家庭を守るべき	1	2	3	4	8	9

問 53〔カード 35〕現代の進んだ医療の一つとして、交通事故や病気などで亡くなった方の心臓や肝臓などの臓器を、重い病気で苦しんでいるほかの人に移植することが可能になっています。このような医療について、あなたのお考えは、次のどちらの意見に近いですか。

- 1 重い病気が人が元気になれるのだからよいことだ
- 2 いくら人の命を救うためとはいえ、亡くなった人の体の一部を取り出すのはよくないことだ
- 8 その他（記入 ）
- 9 わからない

問 55〔カード 37〕次のような場面を想像してください。あなたはある会社に働いています。ある同僚が悪いことをして不当に利益を得ているのを知って、それを上司に報告しようと覚悟していました。ところが、ある日、会社に刃物を持った凶悪な強盗が押し入り、あなたも命の危険にさらされました。しかし、その同僚の活躍によりあなたの命も救われ、事件も解決しました。あなたは、その同僚の不正について、つぎのうちどうしますか。

- 1 命が救われたことには感謝するが、なおかつ不正については上司に報告する
- 2 命を救われたことに感謝し、不正を報告するのはやめる
- 8 その他（記入 ）
- 9 わからない